熊本県文化財調査報告　第 236 集

九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う
埋蔵文化財調査概要報告

島　田　遺　跡

上日置女夫木遺跡

西片百田遺跡

2006

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、平成12年から九州新幹線新八代・西鹿児島間本線部建設事業に伴う埋蔵文化財調査として、八代市内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、弥生時代から近世にかけての遺構を数多く確認することにより八代平野の歴史が明らかになりました。

本報告では、新八代駅周辺で実施された３遺跡の概要についてまとめております。

本報告が広く県民の文化財に対する認識と理解を深めることになることを願います。

なお、発掘調査を実施するにあたり、ご協力とご指導頂きました、鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局、熊本県土木部新幹線都市整備総室、同新幹線八代事務所、八代市教育委員会及び地元の関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成18年3月31日

熊本県教育長　　柿塚　純男

例　言

1　本書は、九州新幹線新八代・西鹿児島間建設事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

2　本書は、熊本県八代市島田町、上日置町及び西片町に所在する島田遺跡、上日置女夫木遺跡、西片百田遺跡が対象で鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局の委託を受けた熊本県教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

3　遺物の整理は、熊本県教育庁文化課文化財資料室で熊本県教育委員会が行った。
　なお、遺物等の一切の資料は平成 18 年 3 月 31 日現在、文化財資料室にて一括保管している。

4　発掘調査は、島田遺跡は平成 13 年から平成 14 年にかけて、上日置女夫木遺跡は平成 13 年から平成 14 年にかけて、西片百田遺跡は平成 12 年から平成 14 年にかけて行った。

5　現地調査での実測及び写真撮影は、熊本県教育委員会が行った。

6　遺構製図は濱崎清子が行い、校正及び編集は横山明代・西畑美希が行った。

7　報告書に掲載した遺物写真撮影は村田百合子が行った。

8　本書の実務・編集は文化財資料室長　野田拓治指導の下に坂口圭太郎が行った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　組織 …… 1
　第1節　県文化課の組織　(平成 17 年度) …… 1
　第2節　調査組織　　(平成 17 年度) …… 1
第Ⅱ章　遺跡の概要 …… 1
　第1節　遺跡の地理的環境と歴史的環境 …… 1
　　1．地理的環境 …… 1
　　2．歴史的環境 …… 1
　第2節　調査の概要 …… 4
　　1．島田遺跡 …… 4
　　2．上日置女夫木遺跡 …… 16
　　3．西片百田遺跡 …… 23

報告書抄録 …… 29
奥書

第Ⅰ章　組織

第1節　県文化課の組織　（平成17年度）

熊本県教育委員会 ── 文化課 ┬ 総務係　（事務手続き等）
　　├ 文化係　（文化振興・文化財の指定・補助金等）
　　├ 調査第二係（県事業・指定文化財現状変更等）
　　└ 調査第一係（受託事業）

第2節　調査組織　（平成17年度）

整理主体	熊本県教育委員会
整理責任者	文化課長　梶野英二
	課長補佐　吉田恵　　課長補佐　倉岡博
整理総括	課長補佐兼調査第一係担当　高木正文
	文化財資料室長　野田拓治
整理担当	参事　坂口圭太郎　　嘱託　横山明代　　嘱託　西畑美希
整理事務	主幹兼総務係長　四元正明　　参事　塚原健一
	主任主事　小谷仁志

第Ⅱ章　遺跡の概要

第1節　地理的環境と歴史的環境

1．地理的環境

九州新幹線新八代駅周辺は八代平野の北西の沖積平野に存在し、西には八代海が広がり、東には九州山地を望んでいる。八代平野は近世から現代に至る干拓により、全平野面積のほぼ80％が旧干潟から形成されている。

干拓以前の本来の地形は、九州山地から流れ出る氷川をはじめとする、いくつかの河川の流れ込みにより形成された沖積平野であった。従来の海岸線が現在の鹿児島本線とする研究史もあり、現在の地形とは大きく異なっていた。

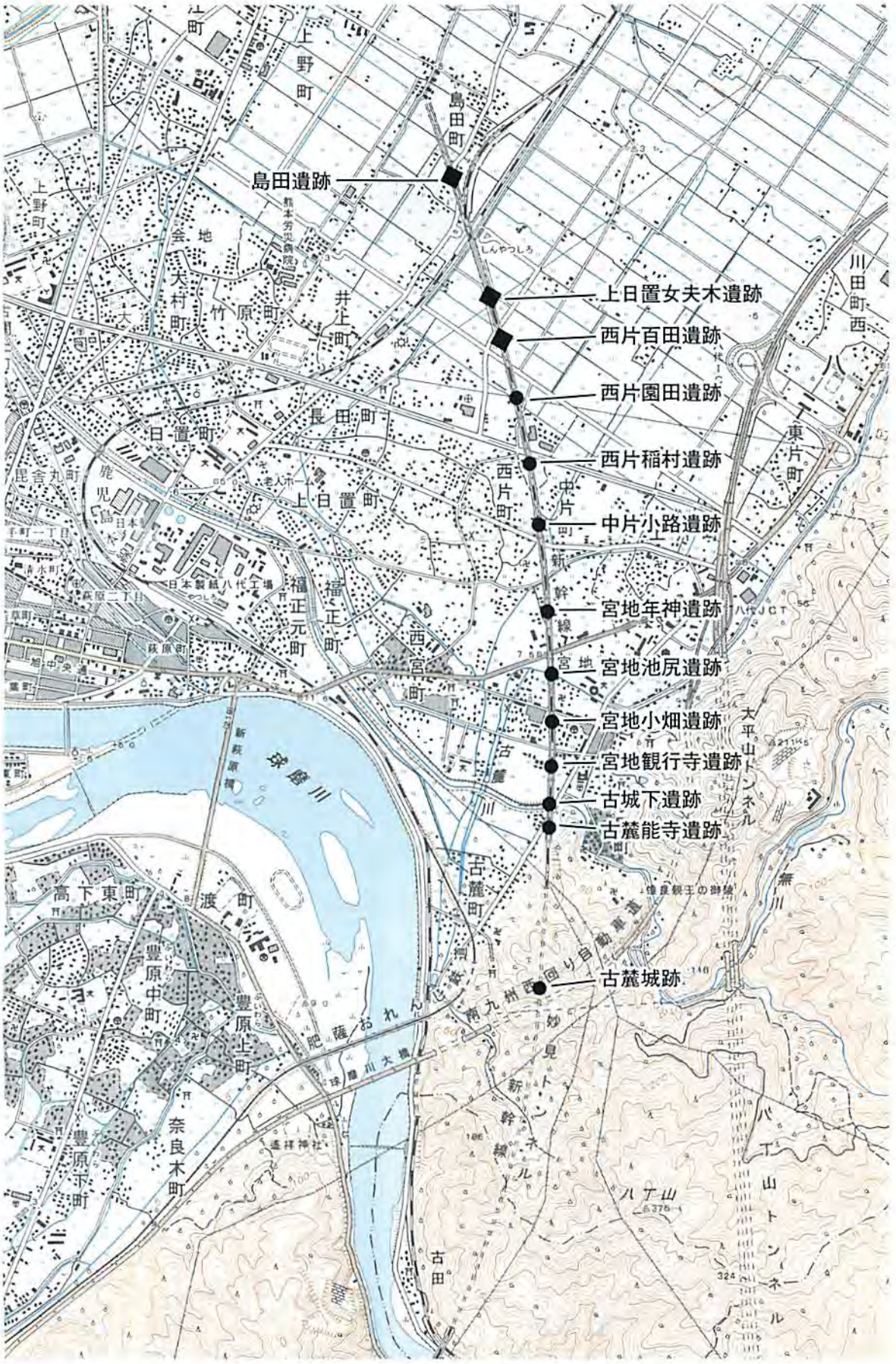
島田遺跡は、旧沖積平野の微高地に位置する。八代市史によると、この地に開田が及んだのは中世以降で、その後、近世から現代に至る干拓により海岸線が移動し今の景観になったと考えられる。従来の八代平野は、四方に水田が広がる田園地帯であったが、近年の開発や、大型の商業施設が進出するにつれて、宅地化が進み急速な変貌を遂げている。

2．歴史的環境

新八代駅の周辺には、数多くの遺跡が点在する。古くは弥生時代から、近世にかけて生活の拠点として利用されている。八代平野は干拓により作り出された人工的な平野であり、従来は干潟であった。

本書では、新八代駅周辺の遺跡の中で九州新幹線建設工事に伴って新たに発見された遺跡について紹介しておく。

西片百田遺跡は、弥生から古墳にかけての集落跡である。キリシタン寺院跡は小西行長の時代に造られたキリシタン寺院で、従来の寺院を壊した後に建てられたと資料に記されており、瓦が表採されている。古麓城跡からは名和氏が八代地方を治めていた時期の五輪塔が出土している。西片稲村遺跡からは刻書土器が見つかっている。上日置女夫木遺跡は、西片百田遺跡よりやや新しい時期に営まれていた集落と墓域を併せ持った遺跡である。西片園田遺跡からは、木器が多量に出土している。島田遺跡は、弥生時代前期の遺跡で、八代平野で確認された最も古い集落跡である。



九州新幹線発掘調査遺跡配置図　(S=1/25,000)

九州新幹線熊本県内発掘調査遺跡一覧表

遺跡名		所在地	調査期間	時代	主な遺構・遺物
島田遺跡	本線	八代市島田町	2001/8/6～ 2002/3/29	弥生前期 弥生後期	竪穴住居跡、土師器、溝 弥生土器、石器等
上日置女夫木遺跡	駅舎	八代市上日置女夫木町 字女夫木	2001/11/1～ 2002/1/31	弥生前期 弥生後期	方形周溝墓、円形周溝墓、竪穴住居跡 弥生土器、土師器等
西片百田遺跡	駅舎及び 本線	八代市西片町 字百田	2000/8/7～ 2002/4/3	弥生後期 古墳初頭	竪穴住居跡、溝、土壙 弥生中期(重弧文土器)、土師器
西片稲村遺跡	本線	八代市西片町 字稲村	2001/4/15～ 2001/9/28	弥生・古代 中世	竪穴住居跡、掘立柱建物、井戸 須恵器、土師器
中片小路遺跡 1区・2区	本線	八代市中片町 字小路	2000/8/1～ 2001/3/31	古墳・中世 近世	近世掘立柱建物、近世墓 旧河川等
	側道	八代市中片町 字小路	2001/10/1～ 2002/2/28	中世・近世	掘立柱建物、井戸、溝
3区・4区	側道	八代市中片町 字小路	2002/12/4～ 2003/3/12	縄文・古墳 中世・近世	溝、流路、墓壙 土壙
宮地年神遺跡	本線	八代市宮地町 字年加奥・源八	2001/11/1～ 2002/5/31	弥生～中世	土坑、掘立柱建物、井戸 弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦質土器
宮地池尻遺跡	本線	八代市宮地町 字池尻	2002/1/31～ 2002/4/30	古墳～近代	竪穴住居跡、土坑、掘立柱建物 須恵器、土師器、陶磁器
宮地小畑遺跡	本線	八代市宮地町 字小畑	2002/2/1～ 2002/6/3	古墳～近代	掘立柱建物、溝、土壙、柱穴等、埋没河川、貝塚(中世) 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁 緑釉陶器、人骨、獣骨、貝等
	側道	八代市宮地町 字小畑	2003/4/1～ 2003/10/30	古代～近世	掘立柱建物、溝、土壙、柱穴等、埋没河川 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁、緑釉陶器等
宮地観行寺遺跡	本線	八代市宮地町 字観行寺	2001/10/9～ 2002/5/14	古代～近世	竪穴住居跡、掘立柱建物、土壙、配石遺構、溝等 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁等
	側道	八代市宮地町 字観行寺	2003/5/6～ 2003/9/30	古代・中世	製鉄関係遺構(炭窯、溝)、敷石溝、土壙等 須恵器、土師器、鉄滓、鈎造剥片
古麓城下遺跡	本線	八代市古麓町 字砥崎	2002/1/8～ 2002/4/20	古代・中世	溝、土壙、柵列 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁、景徳鎮系染付、瓦質土器等
古麓能寺遺跡	本線及び 変電所	八代市古麓町 字能寺	2001/4/28～ 2002/3/20	古代～近世	竪穴住居跡、掘立柱建物、墓壙、柵列、石組井戸、貝塚 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁、景徳鎮系染付 福建系陶器、朝鮮王朝系白磁、常滑系陶器
古麓城跡	本線	八代市古麓町	2000/12/5～ 2001/5/31 2001/10/9～ 2002/4/30	中世	掘立柱建物、石組井戸、木棺墓、五輪塔群、井戸跡 須恵器、土師器、瓦質土器、龍泉窯系青磁

第２節　調査の概要

１．島田遺跡

島田遺跡からは弥生時代前期の遺構として、竪穴住居跡13軒・溝状遺構１条・土坑３基が、古墳時代の遺構として、竪穴住居跡11軒・掘立柱建物３棟・溝状遺構１条・土坑８基が確認された。

出土遺物は、土器・石器等があげられるが、特筆すべきものとして建築部材の『鼠返し』がある。これは、高床倉庫の柱の床直下に取り付けるもので鼠等による食害から倉庫内の穀物を守るために使われたものである。本遺跡では鋤等の木製農具も出土している。以下、調査区毎の概要説明を行う。

Ⅱ区

古墳時代の竪穴住居跡９軒と土坑２基を検出した。住居跡は隅丸長方形または、やや歪な方形を呈する。遺構番号のS047, 048, 051～055, 057, 063は竪穴住居跡、S062, 064は土坑である。

Ⅲ区

弥生時代の竪穴住居跡１軒、古墳時代の竪穴住居跡２軒と土坑７基・溝状遺構１条・掘立柱建物３棟を検出した。『鼠返し』はこれらの建物において使用されていた可能性が高い。

遺構番号のS041, 043, 044は竪穴住居跡、S042, 046, 065, 067, 071, 074は土坑、S073は溝状遺構、S068～070は掘立柱建物である。

Ⅳ区

弥生時代の竪穴住居跡９軒・土坑２基を検出した。住居跡はやや歪な円形または小形の隅丸長方形を呈する。遺構番号のS001～003, 010～015は竪穴住居跡、S020, 021は土坑である。

Ⅴ区

弥生時代の竪穴住居跡１軒・土坑２基を検出した。住居跡はやや歪な隅丸長方形を呈する。

遺構番号のS009は竪穴住居跡、S017, 018は土坑である。

Ⅵ区

弥生時代の竪穴住居跡５軒・土坑１基・溝状遺構１条を検出した。住居跡は他の調査区に比べやや大型の円形または隅丸長方形を呈する。溝状遺構の性格は不明であるが、住居群の東側でやや下がり気味の場所に掘られていることから、雨水等の排水路であった可能性がある。

遺構番号のS004～008は竪穴住居跡、S016は土坑、S023は溝状遺構、S024, 025は土器溜である。

以下は、本遺跡における主な遺構の概要である。

Ⅲ区　S071

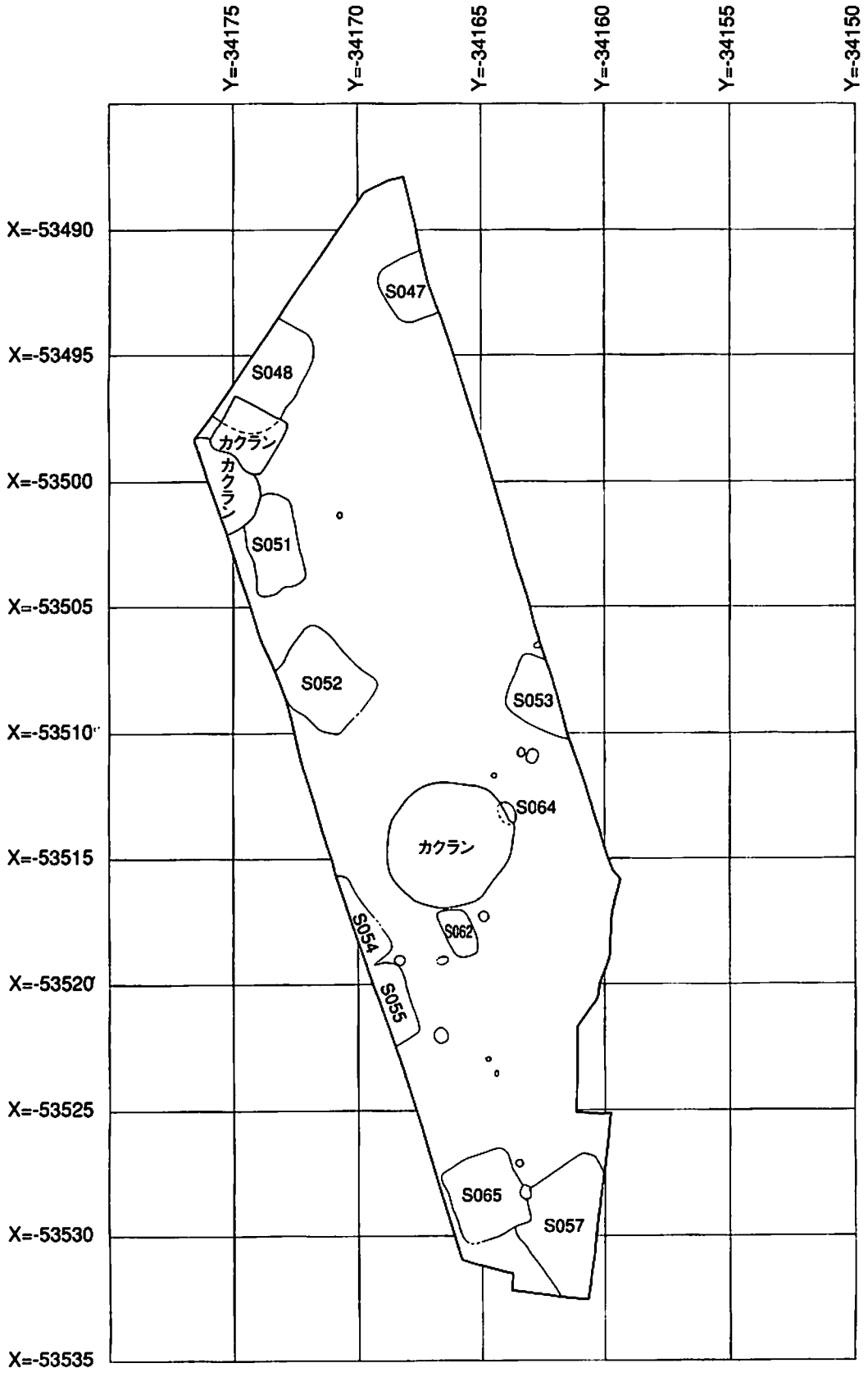
Ⅲ区の北側部において確認した土坑である。形態は、2.46m×1.39m×0.63mの楕円形を呈する。本遺構からは、鼠返しが重なるように２点、さらにその下から鋤が１点出土している。そのほかにも多くの木片や土器等が出土している。

Ⅳ区　S001

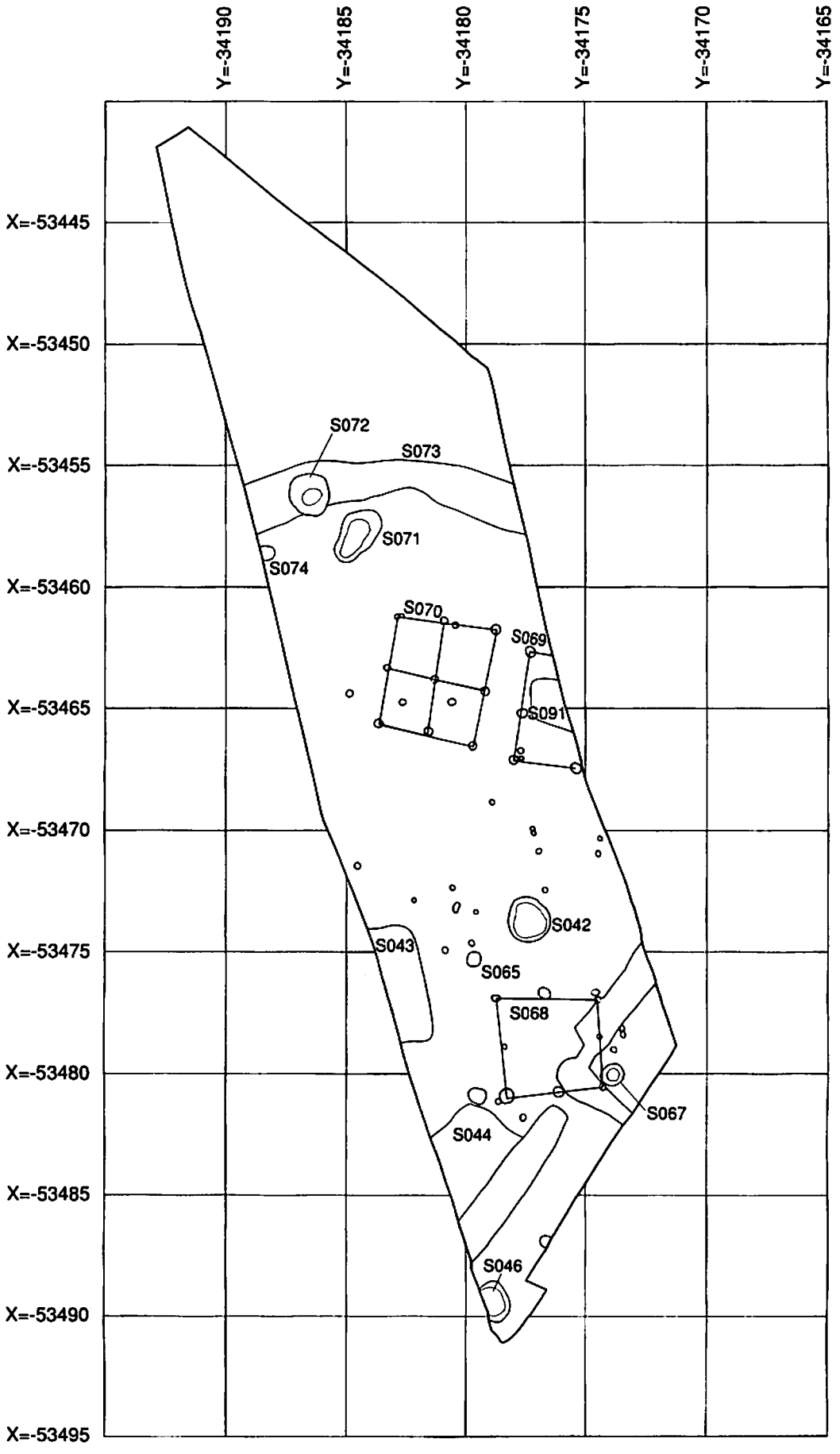
Ⅳ区の北側部において確認した竪穴住居跡である。平面形態は、やや歪な円形で南北軸5.02m、東西軸4.90m、深さ約10cmである。主柱穴は６本で、中央には炉と考えられる浅い掘り込みを確認した。

Ⅳ区　S002

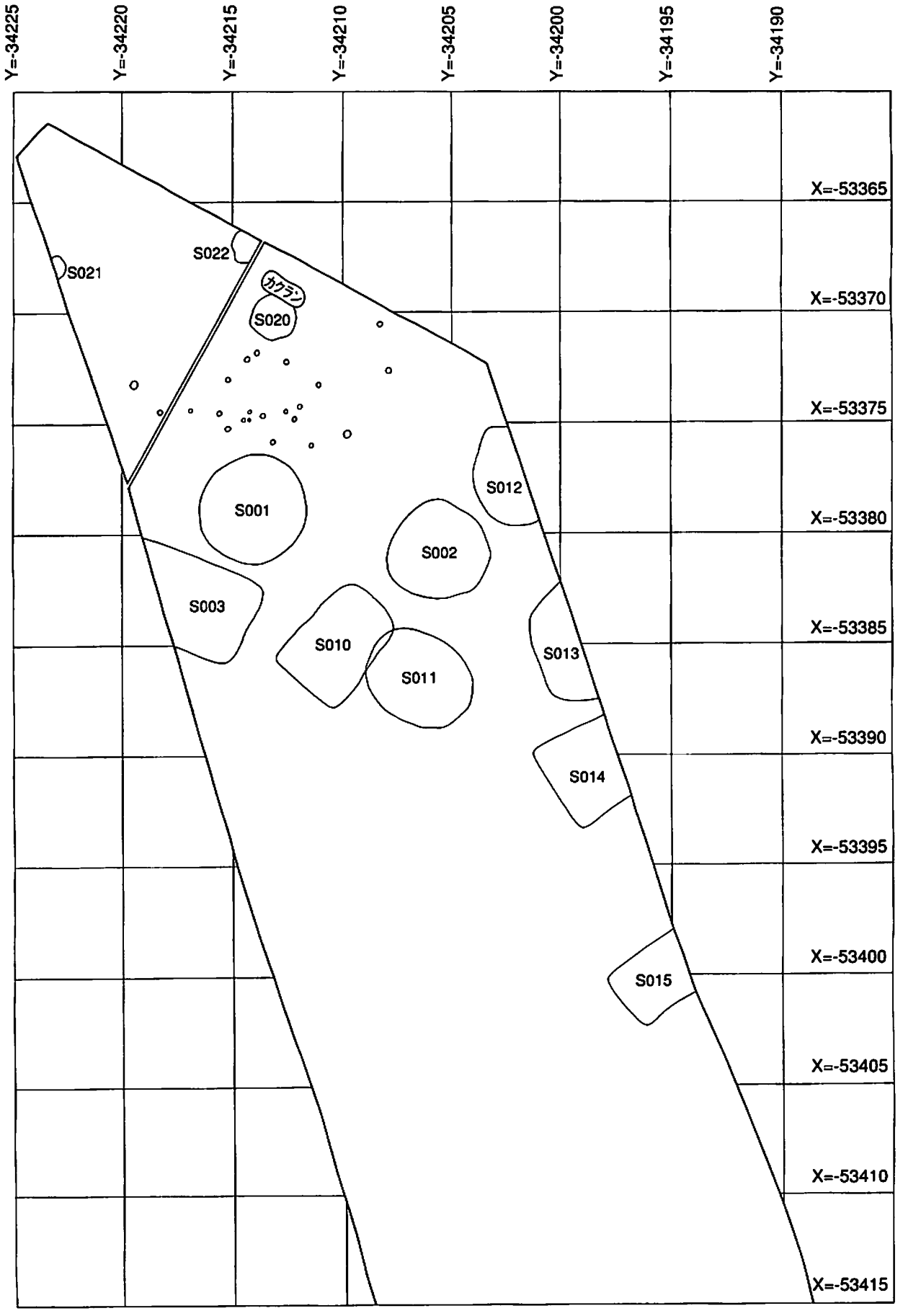
Ⅳ区の北側部、S001の南東側において確認した竪穴住居跡である。平面形態は、S001同様やや歪な円形を呈し、南北軸4.38m、東西軸4.55m、深さ約22cmである。主柱穴は５本で、中央には炉と考えられる浅い掘り込みを確認した。


Y=-34175
Y=-34170
Y=-34165
Y=-34160
Y=-34155
Y=-34150
X=-53490
X=-53495
X=-53500
X=-53505
X=-53510
X=-53515
X=-53520
X=-53525
X=-53530
X=-53535
S047
S048
カクラン
カクラン
S051
S052
S053
S064
カクラン
S062
S054
S055
S065
S057

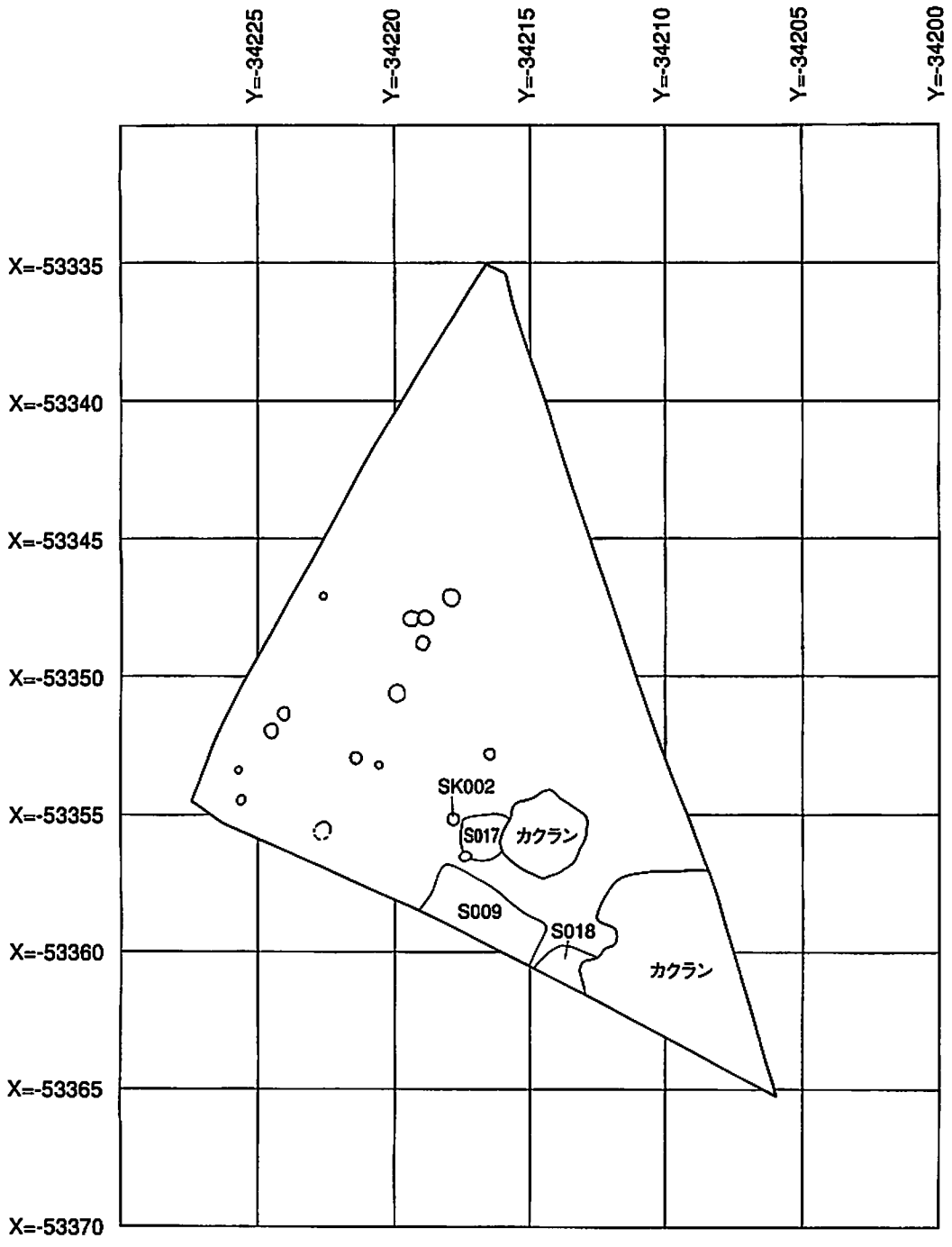
Ⅱ区全体図　(S=1/250)


Y=-34190
Y=-34185
Y=-34180
Y=-34175
Y=-34170
Y=-34165
X=-53445
X=-53450
X=-53455
X=-53460
X=-53465
X=-53470
X=-53475
X=-53480
X=-53485
X=-53490
X=-53495
S072
S073
S071
S074
S070
S069
S091
S042
S043
S065
S068
S067
S044
S046

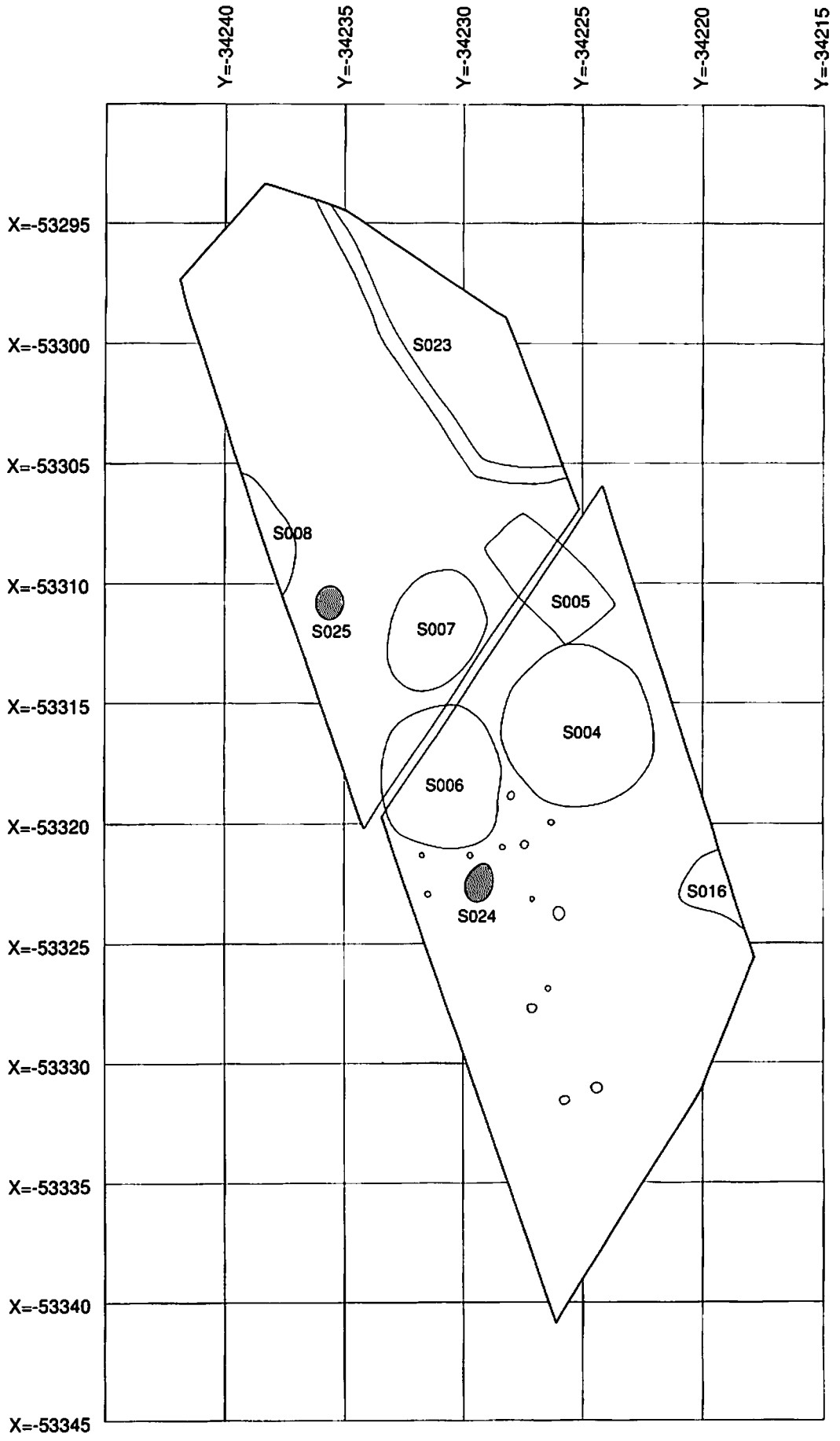
Ⅲ区全体図　(S=1/250)


Y=-34225
Y=-34220
Y=-34215
Y=-34210
Y=-34205
Y=-34200
Y=-34195
Y=-34190
X=-53365
X=-53370
X=-53375
X=-53380
X=-53385
X=-53390
X=-53395
X=-53400
X=-53405
X=-53410
X=-53415
S021
S022
カクラン
S020
S001
S002
S003
S010
S011
S012
S013
S014
S015

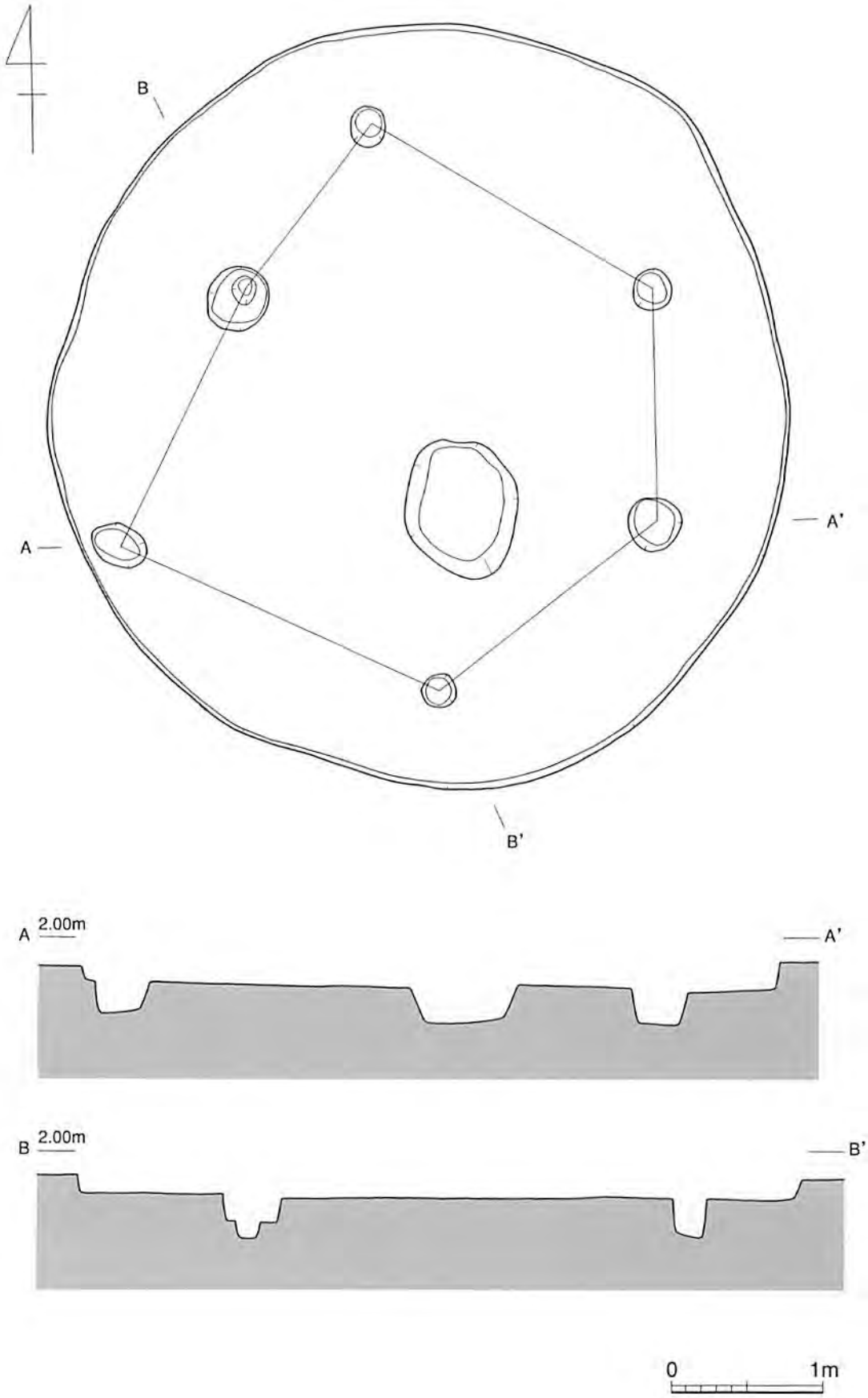
Ⅳ区全体図　(S=1/250)


Y=-34225
Y=-34220
Y=-34215
Y=-34210
Y=-34205
Y=-34200
X=-53335
X=-53340
X=-53345
X=-53350
X=-53355
X=-53360
X=-53365
X=-53370
SK002
S017
カクラン
S009
S018
カクラン

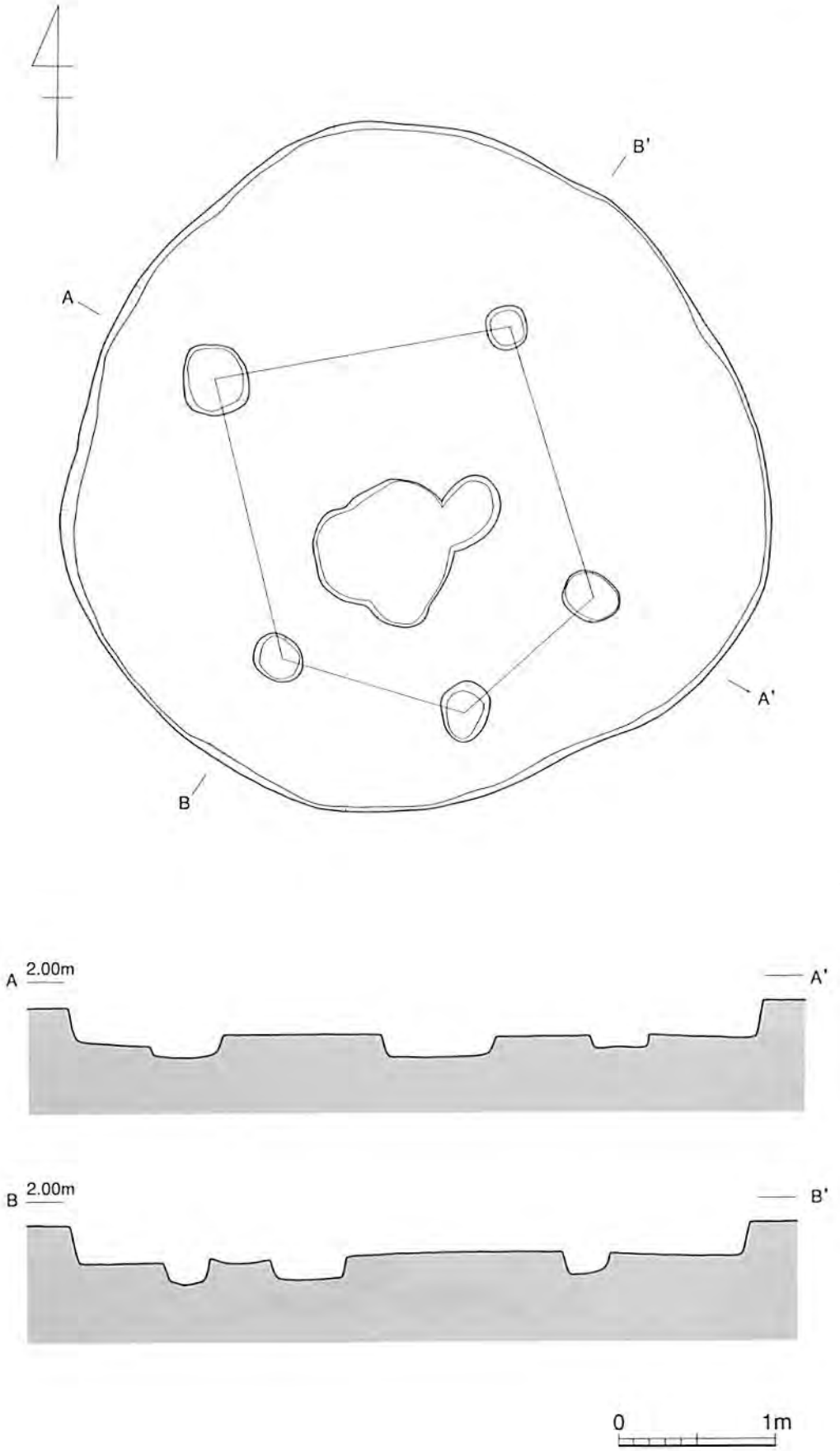
V区全体図　(S=1/250)


Y=-34240
Y=-34235
Y=-34230
Y=-34225
Y=-34220
Y=-34215
X=-53295
X=-53300
X=-53305
X=-53310
X=-53315
X=-53320
X=-53325
X=-53330
X=-53335
X=-53340
X=-53345
S023
S008
S025
S007
S005
S004
S006
S024
S016

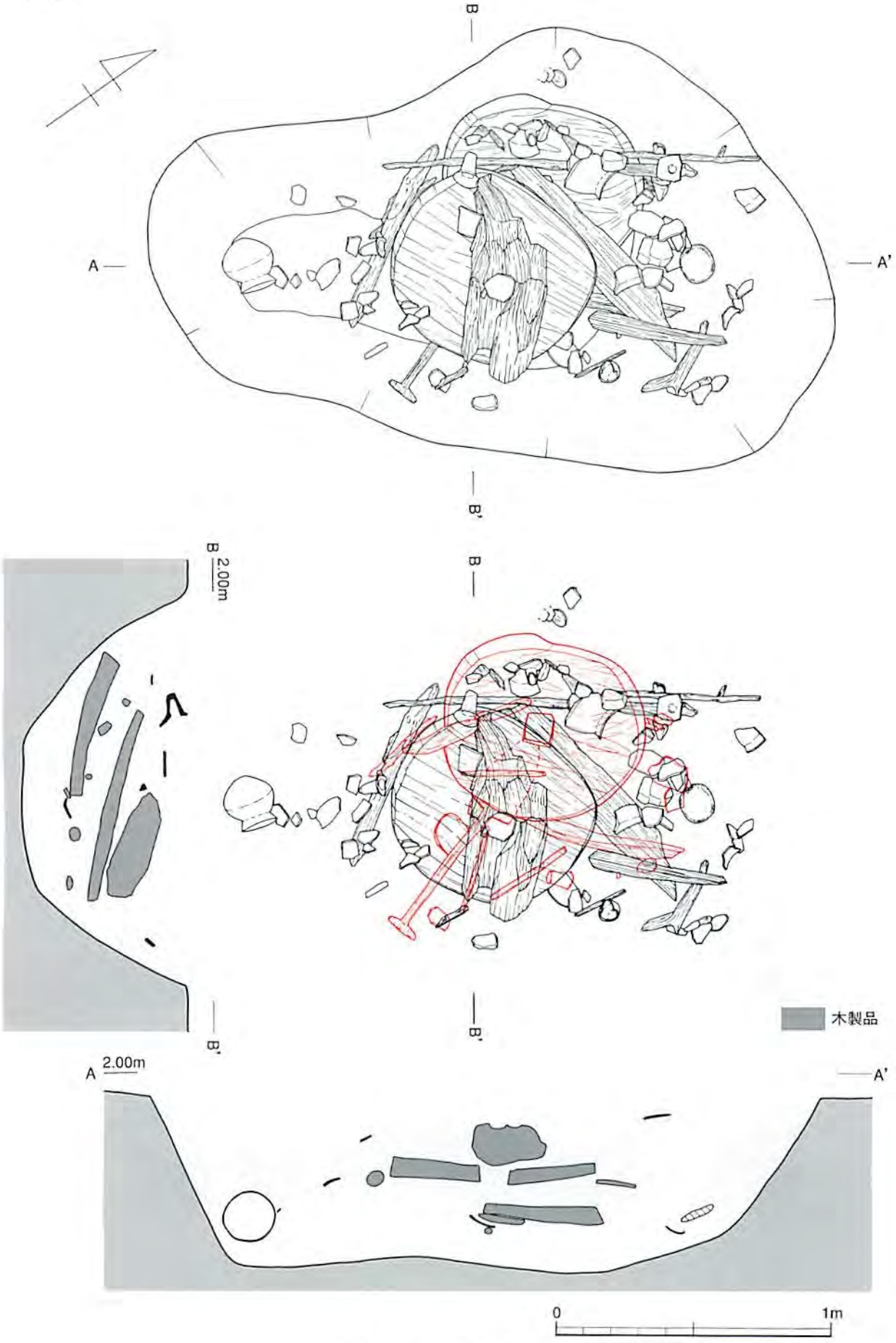
Ⅵ区全体図　(S=1/250)



Ⅳ区　S001　竪穴住居実測図



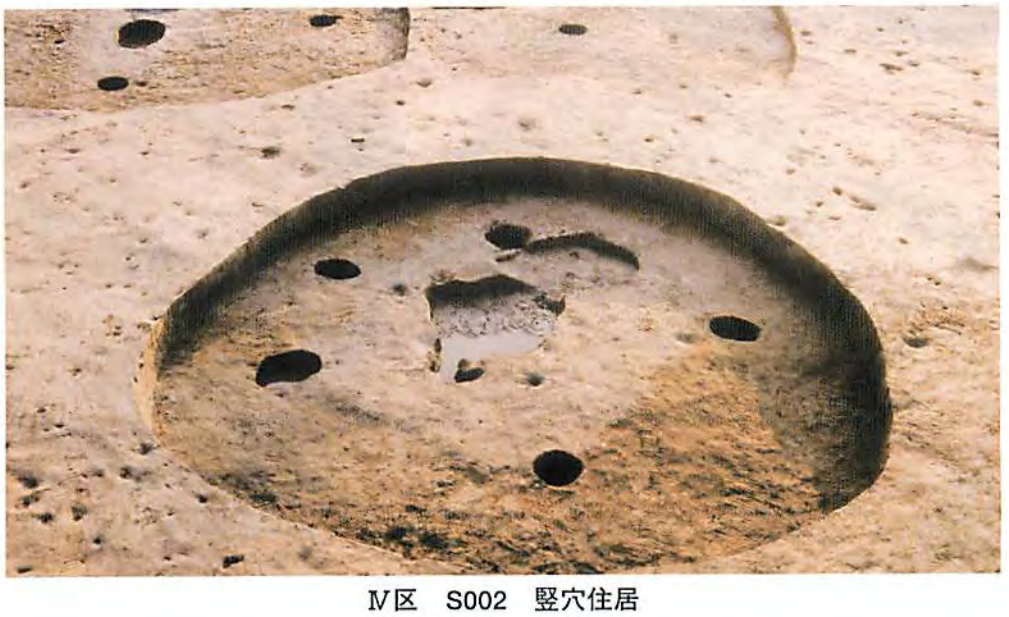
Ⅳ区　S002　竪穴住居実測図



Ⅲ区　S071　土坑実測図

Ⅳ区　竪穴住居全景

Ⅳ区　S001　竪穴住居



Ⅳ区　S002　竪穴住居

Ⅲ区　S071

Ⅲ区　S071

Ⅲ区　S071 完掘状況

S071出土　ねずみ返し

S071出土　二又鋤

土器集合

2．上日置女夫木遺跡

本遺跡は、新八代駅舎建設に伴って発掘調査が実施された。本遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡20軒以上・周溝墓６基・溝状遺構１条・土坑多数を確認している。

出土した遺物は、土器、石器、鉄器等多量にある。

本遺跡において特筆しておきたいものが周溝墓である。

当初の調査では２基のみと考えられていたが、その後、新たに４基を確認し、全部で６基検出した。

周溝の形から、５基は方形周溝墓で残り１基が円形周溝墓と考えられる。形態と切り合いから、方形周溝墓が円形周溝墓に先行すると考えられる。

周溝墓の溝からは祭祀に使ったと考えられる土器が多量に見つかっており、当時の文化を知る上での重要な資料である。

遺構番号のS001, 005, 012, 015, 016, 018, 020, 022, 025～027, 030～032, 036, 037, 041, 046, 051, 052, 056, 061は竪穴住居跡である。S010は溝状遺構である。S013, 014, 050, 055, 057, 058は周溝墓である。S002, 003は形態から土器溜と考えられる。

以下は、本遺跡における主な遺構の概要である。

S005・S027

調査区の中央付近で検出した竪穴住居跡である。S005の形態は隅丸長方形で3.90m×3.25m×約0.40mを測る。主柱穴は2本で、中央には炉と考えられる浅い掘り込みを確認した。

S027の形態はやや南側が歪に広がっているが、S005と同様の隅丸長方形で6.90m×5.30m×約0.35mを測る。主柱穴は4本で、中央には炉と考えられる浅い掘り込みを確認した。また、長軸上に3本の柱穴跡を確認したが、中央の梁を支えるための柱穴跡と考えられる。床面は両隅にベッド状の高まりをもつ。また、この遺構の東側に浅い掘り込みが見られるが、貯蔵穴の可能性も考えられる。

S013

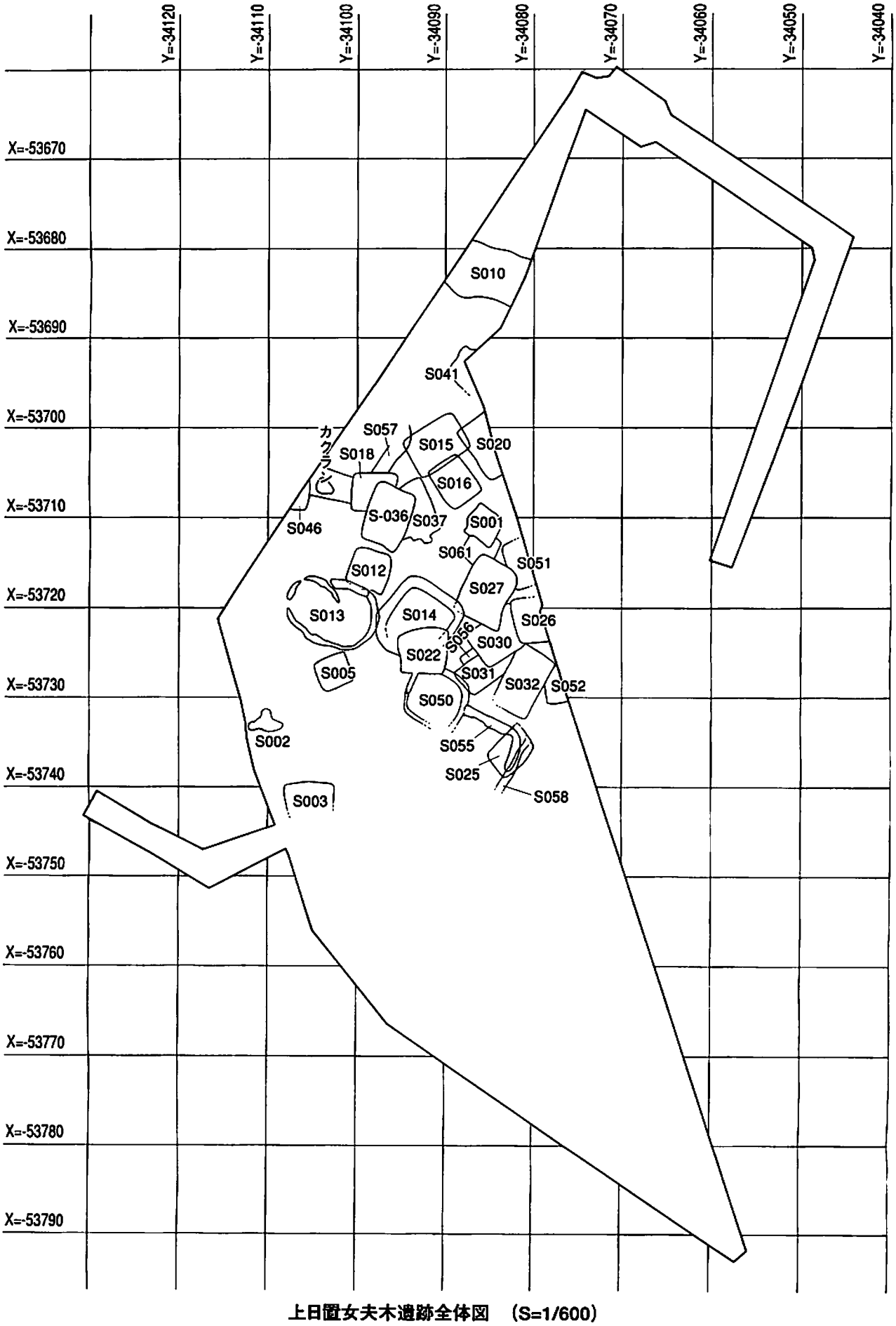
調査区中央、やや西側で検出した円形周溝墓である。形態は南北にやや長い楕円形を呈する。長軸10.90m×短軸7.70mを測る。

2つの周溝墓が切り合っている可能性もあるが、本報告では単一の円形周溝墓と考えている。周溝は広い箇所で幅約1.00m、狭い箇所で約0.30m、深さは深い箇所で約0.50m、浅い箇所で約0.25mを測る。周溝は一部で切れており、その箇所が陸橋部にあたると考えられる。全体的に削平を受けているため、主体部は確認出来なかった。

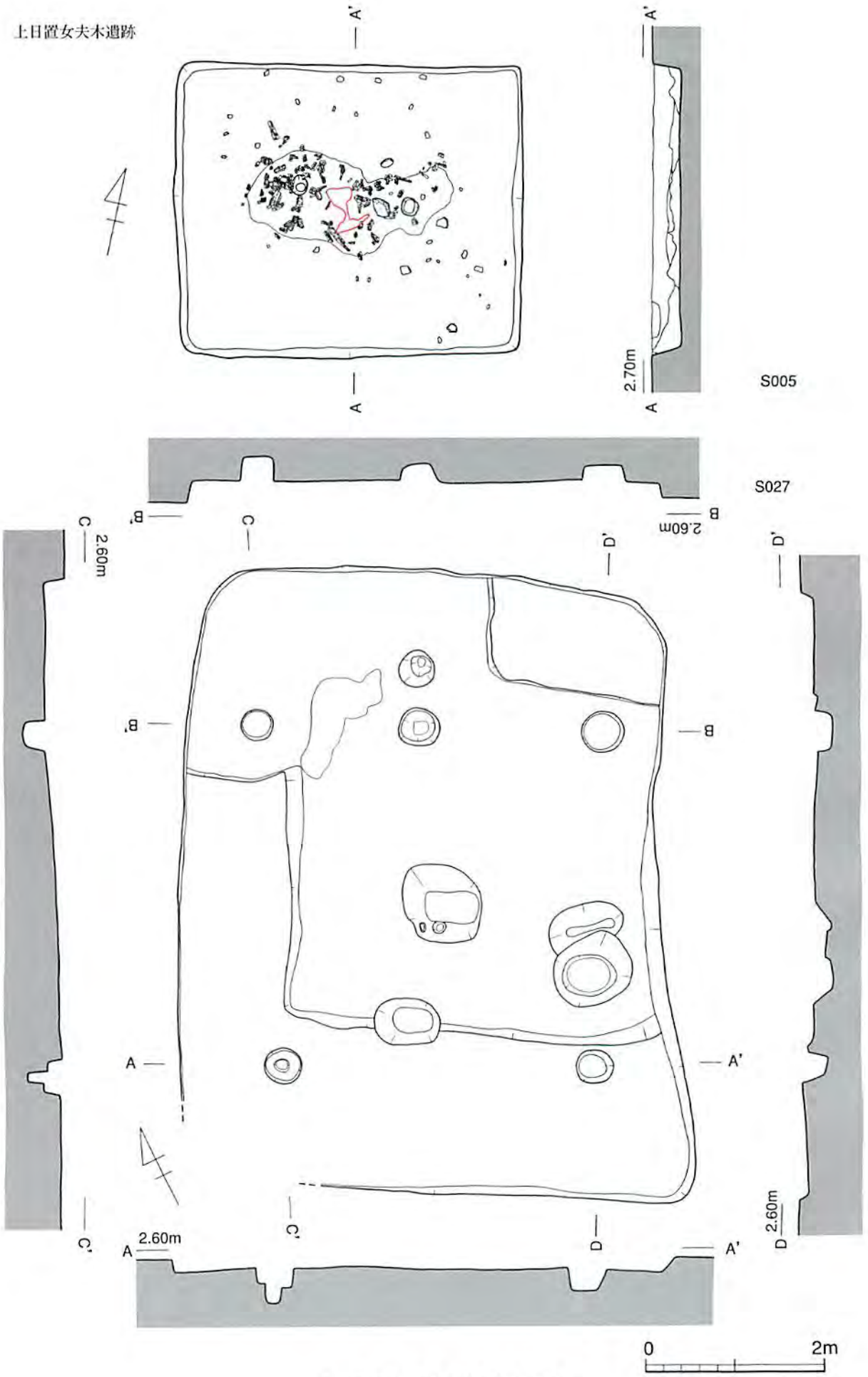
S014

調査区中央付近で検出した方形周溝墓である。形態はほぼ正方形を呈する。長軸9.10m×短軸8.30mを測る。

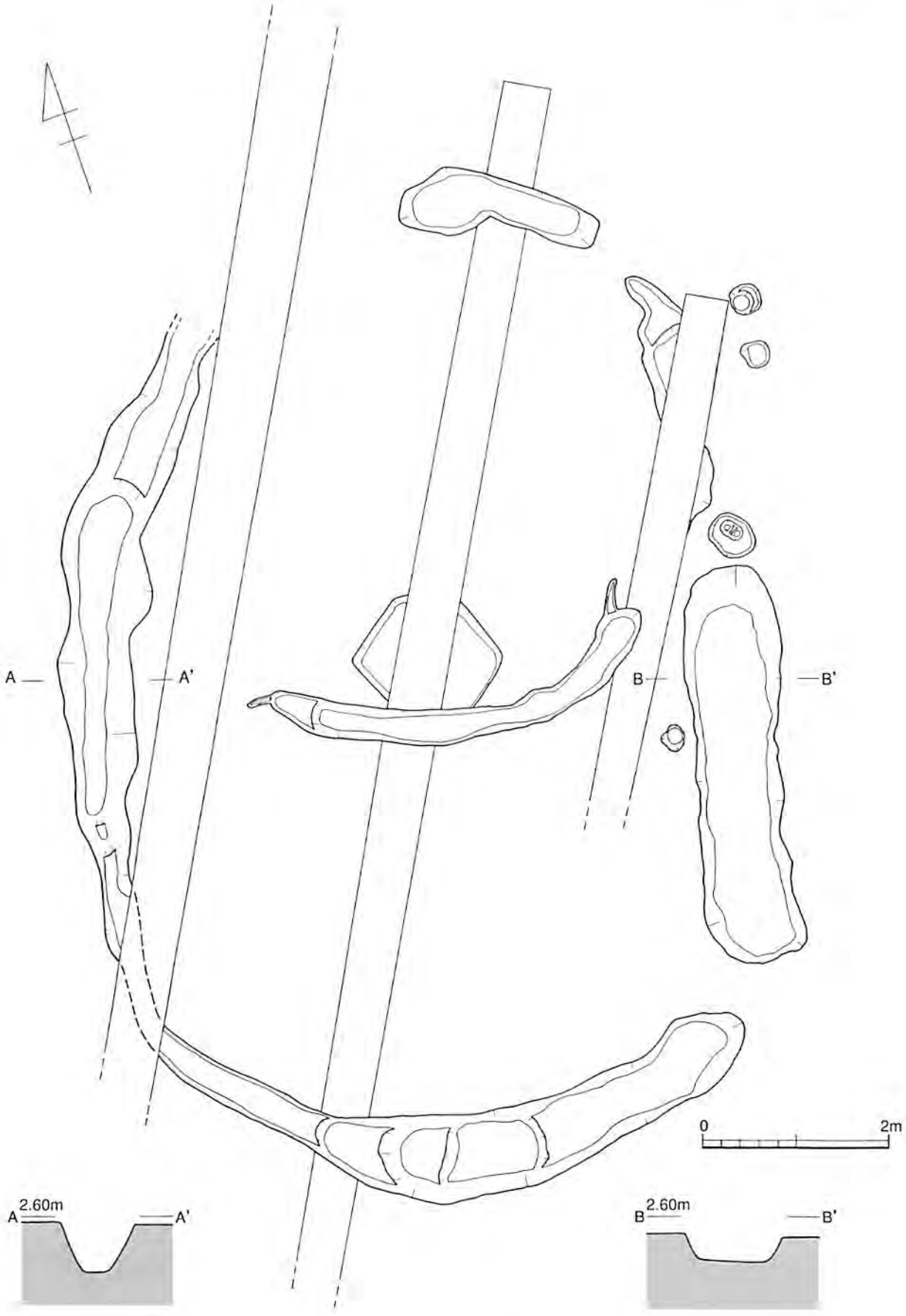
周溝は広い箇所で幅約1.20m、狭い箇所で約0.90m、深さは深い箇所で約0.40m、浅い箇所で約0.30mを測る。南西部をS002によって削平されている。そのため陸橋部の特定は困難であるが、削平された範囲にあたる可能性が高い。周溝内で確認したピットが伴うものかどうかは確認出来なかった。全体的に削平を受けているため、主体部は確認出来なかった。



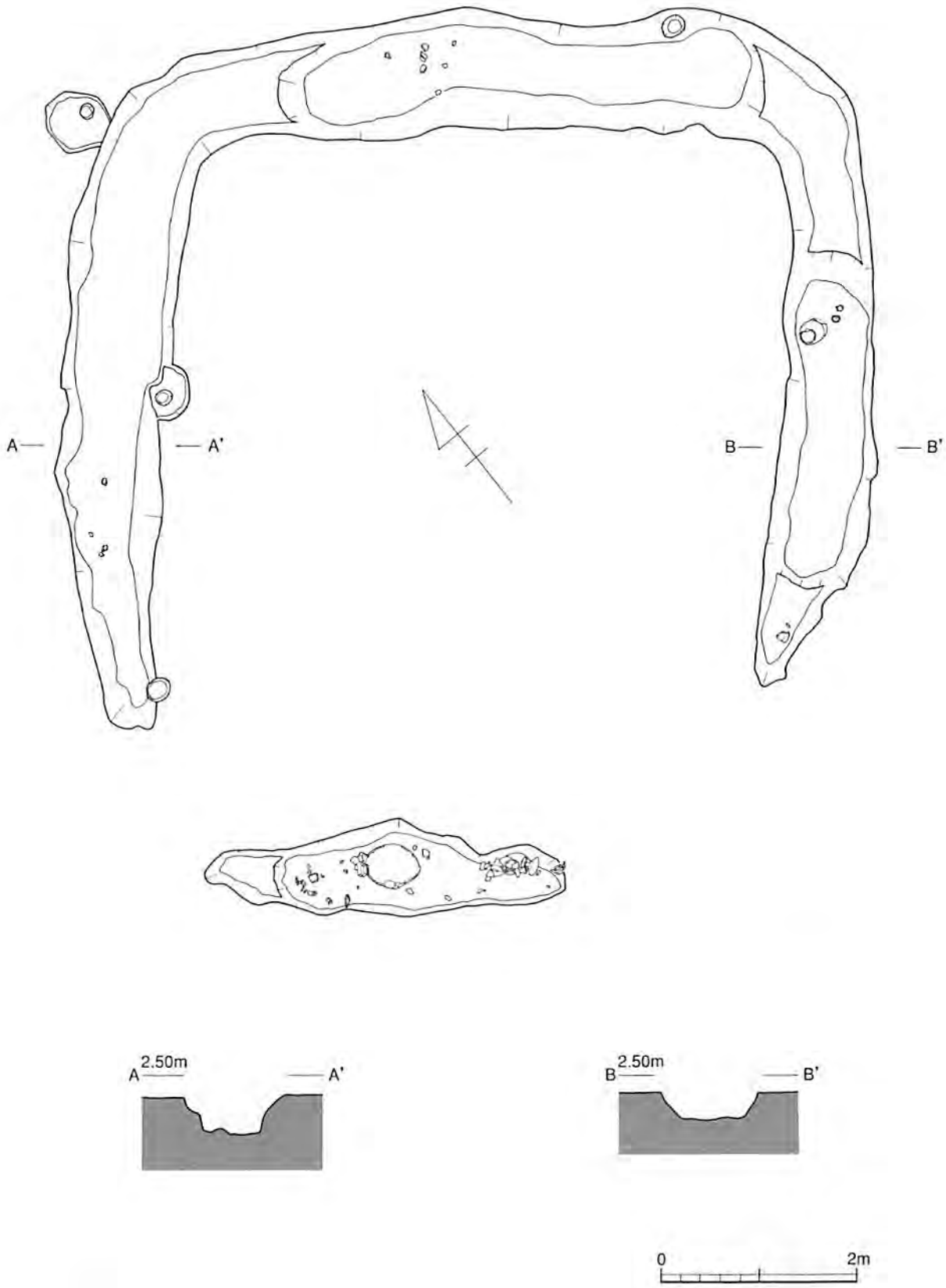
上日置女夫木遺跡全体図　(S=1/600)



S005、027　竪穴住居実測図

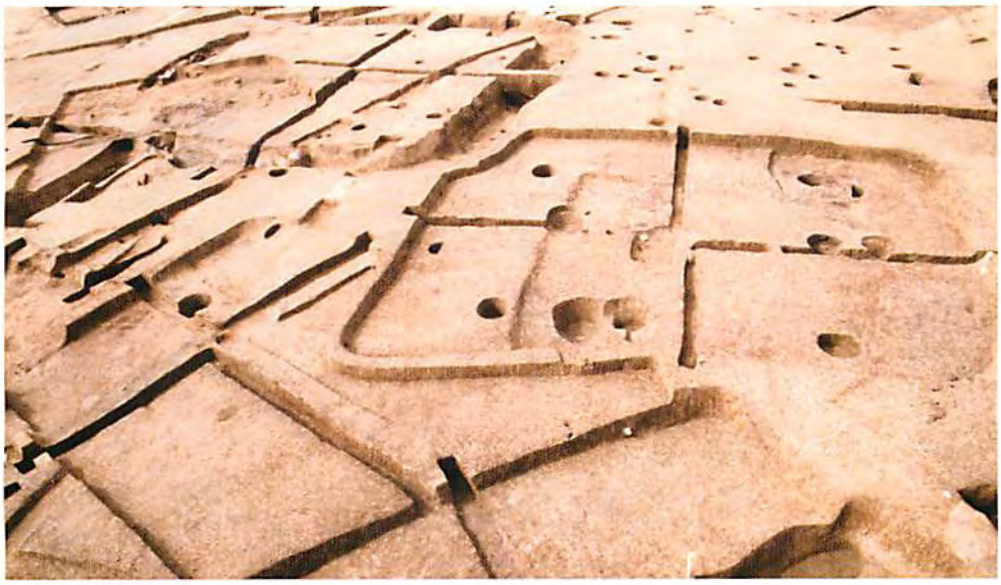


S013　円形周溝墓実測図



S014　方形周溝墓実測図

S005　竪穴住居



S027　竪穴住居

S013　円形周溝墓　遺物出土状況

S013　円形周溝墓　完掘状況

S014　方形周溝墓　遺物出土状況

S014　方形周溝墓　完掘状況

3．西片百田遺跡

遺跡は八代平野内にあたり沖積平野上に位置し、標高は約３ｍ前後を測る。現在は水田が広がる平地であるが、昭和40年代の圃場整備前までは九州山地から伸びる低丘陵が一部に伸びていた起伏ある土地であったようである。中世の遺物は表土中に含まれるため、おそらく圃場整備時に削平され、当時の生活面は残っていないと思われる。

表土剥ぎ後には、古墳時代初頭及び弥生時代後期の竪穴住居跡の検出面となり遺構の検出から調査を始めた。遺構は、遺跡の西側で弥生時代後期の集落跡が広がり、東側にかけて古墳時代の集落が広がっている。

調査区は西側から現在の水田筆毎に１区から７区までを設定し、調査を実施した。２区、３区からは重弧文長頸壺土器（免田式土器）を含む弥生時代後期の土器が竪穴式住居跡から多く出土し、当時の人々の生活の風景が覗えよう。また、竪穴式住居跡との空いた空間には浅く掘り窪めた土坑（用途は不明）が多数検出されている。

竪穴住居跡内には、中央部に円形の炉が設置され、それを挟むように柱穴が２本検出されている。主に生活道具として使われていた土器は、その多くが住居内の壁近くや炉の周辺から甕や壺、鉢、高杯などが出土している。

遺跡の東側には、４区を境に古墳時代の遺構が多数検出され始める。主な遺構としては、浅い溝状遺構からなる畑畦状遺構や竪穴住居跡、土坑などがある。

畑畦状遺構は基幹水路となる深い溝状の遺構を中心にそこから両側に派生する浅く幅の狭い溝が等間隔で広がる。浅い溝状遺構埋土中には遺物はほとんど含まれないが、中央の溝に含まれる土器等から古墳時代初頭の時期が想定できる。

竪穴住居跡からは弥生時代からの土器の系譜を引き継ぐ、やや赤く厚ぼったい土師器と呼ばれる土器が多く出土している。

出土してくる土器には、八代地域だけではなく広く交易圏があったと思われる土器も多く見受けられる。瀬戸内系の器形を呈する高杯や朝鮮系無文土器の甕等がある。

現在では干拓によって遠くなった海岸線が当時は、内陸近くまであり天然の港が近くにあったのではないかと思われる。

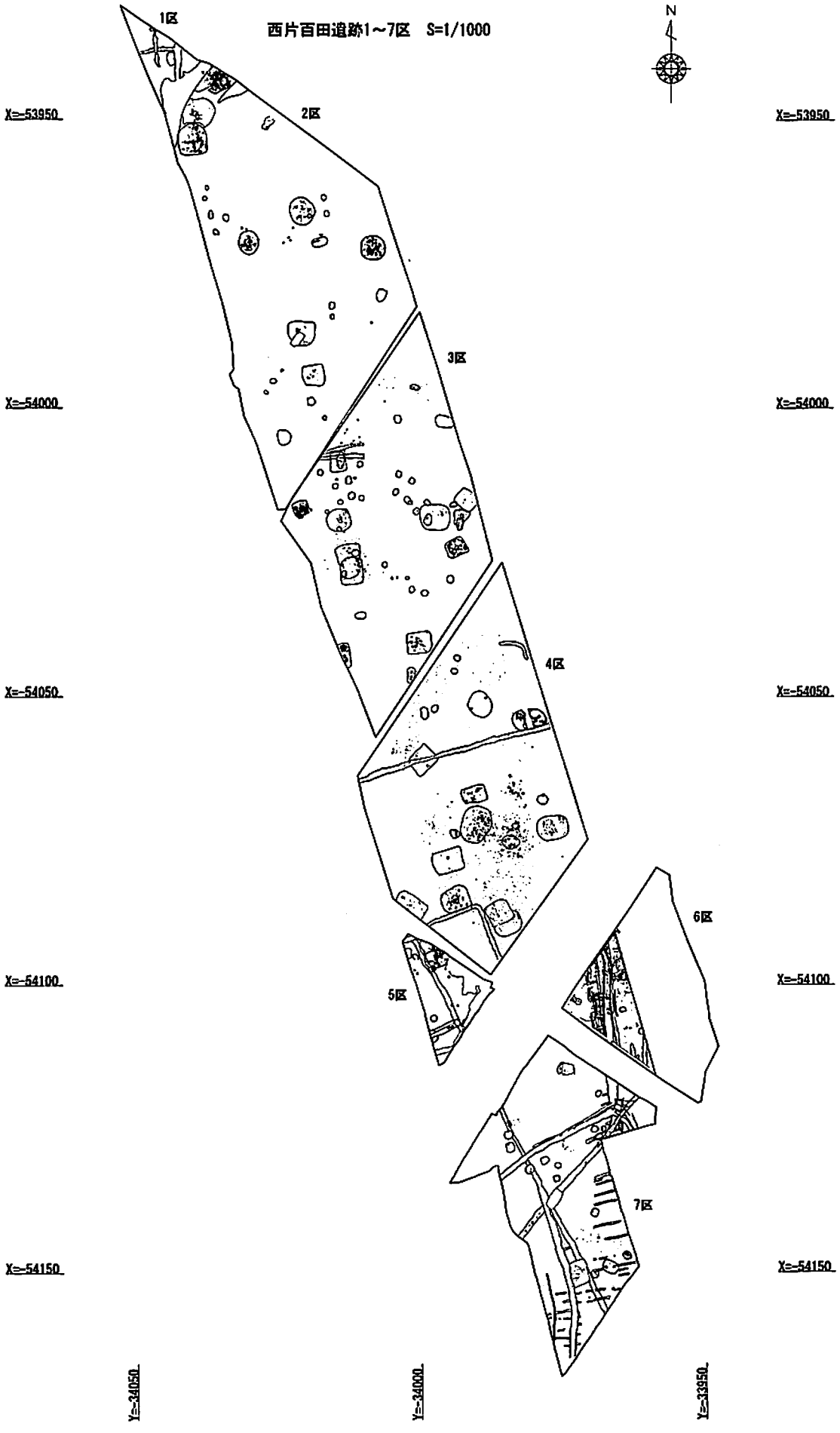
２区　SI02

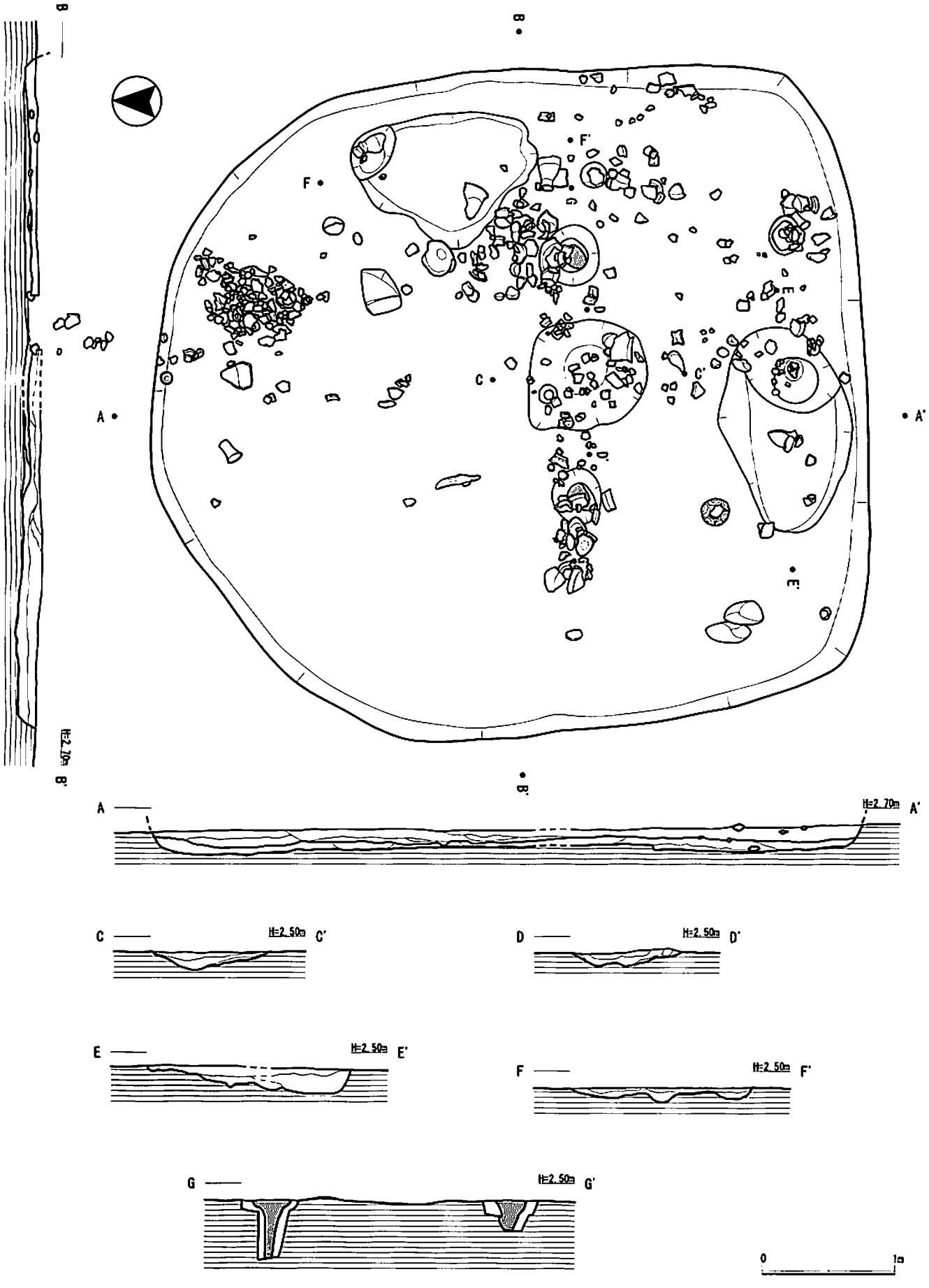
２区において確認した竪穴住居跡である。平面形態は、やや歪な円形で南北軸5.42ｍ、東西軸5.05ｍ、深さ約５㎝である。主柱穴は２本で、中央には炉と考えられる浅い掘り込みを確認した。また、住居の壁面近くに浅い掘り込みを確認したが、貯蔵穴と考えられる。

4区　SI05

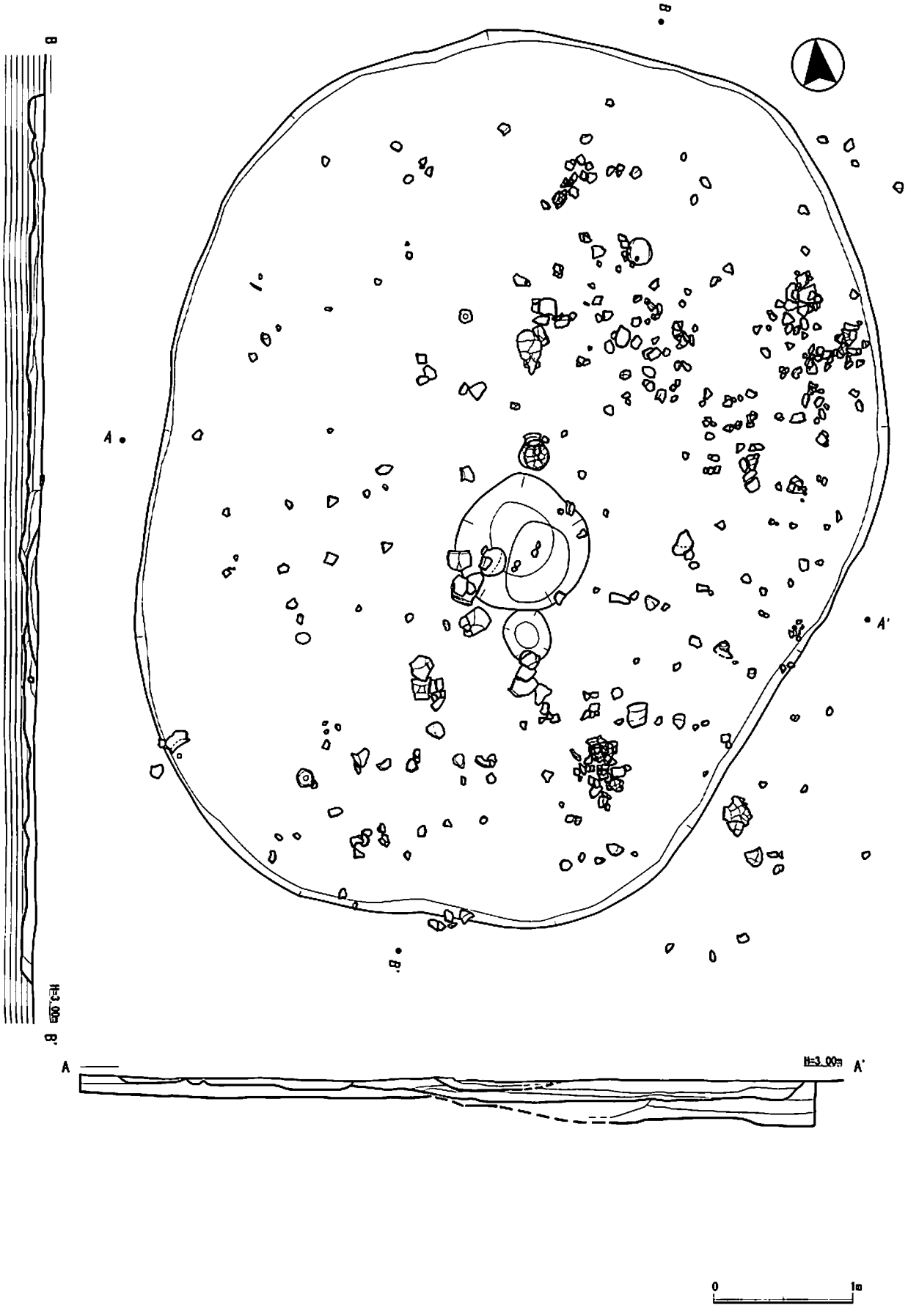
４区において確認した竪穴住居跡である。平面形態は、やや歪な楕円形で南北軸6.30ｍ、東西軸5.10ｍ、深さ約20㎝である。主柱穴は２本で、中央には炉と考えられる浅い掘り込みを確認した。

西片百田遺跡


西片百田遺跡1～7区　S=1/1000
N
1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
X=-53950
X=-54000
X=-54050
X=-54100
X=-54150
Y=-34050
Y=-34000
Y=-33950



2区　SI02　竪穴住居実測図



4区　SI05　竪穴住居実測図

2区　竪穴住居検出状況

5区　完掘状況

報　告　書　抄　録

フリガナ	ｷｭｳｼｭｳｼﾝｶﾝｾﾝｼﾝﾔﾂｼﾛ･ﾆｼｶｺﾞｼﾏｶﾝｹﾝｾﾂｺｳｼﾞﾆﾄﾓﾅｳﾏｲｿﾞｳﾌﾞﾝｶｻﾞｲｶﾞｲｺｳﾎｳｺｸ
書名	九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財調査概要報告
副書名	島田遺跡　上日置女夫木遺跡　西片百田遺跡
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第236集
編著者	坂口　圭太郎
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862－8570　　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	平成18年3月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
シマダイセキ 島田遺跡	クマモトケンヤツシロシ 熊本県八代市 シマダマチ　ホカ 島田町1-9-2他	202	224	32°47′ 27″	130°49′ 31″	H13.8.6 ～ H14.3.29	3,200㎡	九州新幹線 建設工事
カミヒオキメオトギイセキ 上日置女夫木遺跡	カミヒオキマチメオトギ　ホカ 上日置町女夫木211他	202	227	32°47′ 27″	130°53′ 37″	H13.11.1 ～ H14.1.31	2,800㎡	九州新幹線 建設工事
ニシカタヒャクタイセキ 西片百田遺跡	ニシカタマチヒャクタ　ホカ 西片町百田131他	202	226	32°17′ 27″	130°47′ 27″	H12.8.7 ～ H14.4.3	6,282㎡	九州新幹線 建設工事

熊本県文化財調査報告　第236集

九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財調査概要報告

発行年月日　平成18年3月31日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒862－8609　熊本市水前寺6丁目18番1号

印　　刷　株式会社 大和印刷所
〒861－8031　熊本市戸島町920-11（コスモ工業団地）

17 教委 教文
② 007

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 236 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財調査概要報告
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日